

特別授業記録

主題 生きる絆

資料「ナイン」（井上ひさし作）

板野中学校3年B組 指導者 森口健司

T1：今日も生きることを求めて、みんなの思いや願いを語り合いたいと思います。最初に前の時間話し合ったことについて、前の時間の板書を見ながら振り返ってみたいと思います。

新野（男）：新道という街は、新道少年野球団があったことで活気づいてとても温かい街になったと思います。そしてその中で人々は、新道少年野球団を新道の象徴として新道にはなくてはならない存在だと思っていたと思います。



森川（男）：新道少年野球団は新道の誇りであり、象徴であったと思います。新道は変わってしまったけれど、ナインのみんなには、変わってほしくないという思いが中村さんにはあって、昔の新道のような家族のつながりがいつまでもあってほしいなだろうと思いました。

川田（女）：新道少年野球団は、新道にとってすごく大きな存在であったと思います。中村さんにとっても昔の思い出を語れる最高のチームだったと思います。

圓藤（女）：新道少年野球団に象徴されるみたいに、新道は華やかになったけれど、その代わりに人と人とのつながりとか自信とか、そんなのがなくなったというのが1時間目の一番大きな印象です。

村山（男）：新道と新道少年野球団はお互いに支え合う関係があって、それで新道は自分の子供たちが少年野球団にいたから、その新道の人たち全体のつながりがあって、いろいろと結び付いていて、その新道について話すにはいつも新道少年野球団のことが出てきたりして、それで今は新道少年野球団の方は何か離れ離れになったけど、新道は何か商店街としてにぎやかになったものの、人と人との係わりとか接触はなくなって、この新道は一つに家族だったけど、その家族的な何か失われつつあると思います。

久保（男）：新道と新道少年野球団は本当につながっていて、だれからも愛される存在であって、やっぱり何かで結ばれていたと思います。

井上（女）：前の時間勉強して新道と新道少年野球団というのは、同じようなものだったんだと思います。新道の人たちが見せた人間と人間の絆というのがナインの見せた絆であって、新道が変わっていくと共にナインのみんなも変わっていったから、中村さんは昔の新道少年野球団を思い起こ

すことによって、昔のままの人間と人間のつながりのあった新道のままで変わらないでほしいと願ったんだと私は思いました。

T2：中村さんの思いを通して、新道少年野球団や新道商店街について考えてきたわけですけど、この時間は陰をつくり合いながら最後まで決勝戦を戦い抜いた新道少年野球団のナインの気持ちについて話し合いたいと思います。（板書①）

稲井（女）：英夫が炎天下で12回を完投できたのは、陰をつくってくれた正太郎のおかげだし、その周りで支えてくれたナイン一人ひとりの支えで12回まで完投できたんだと思います。

中山（女）：陰が一つもないところでの試合は本当につらかったと思います。ナインが陰をつくってくれた時にあまり暑さは変わらなかったかもしれないけれど、この英夫には何十倍も涼しく感じられたと思います。そして、そういうふうに支えられ、励まして励まされてきた仲間とだったから、やっぱり最後まで頑張れたんだと思います。

漆原（男）：もう6回まできたら、もう英夫もかなりバテていたと思うんです。そこへ正太郎の日陰がきて、やっぱりすごく驚いたと思うんです。正太郎自身はそんな友情とか、そんな関係なくて勝ちたい一心のところそういう考えができてきたと思うんです。でも他のナインから見たら、正太郎がすごくすばらしい人間に見えて、また自分たちナインの友情もあるんだなあというのを感じたと思います。

T3：正太郎が日陰をつくったということにふれて、今発言がありましたけど、漆原君の発言につなげてほしいと思います。

井上（男）：やっぱりみんなの言うようにこんな厳しい中で戦ったんだから、ナインの関係も深まっていったと思います。そして、あのパレードの時に泣いていたのは、やっぱり陰をつくり合うという関係が深まって、悔しさよりもすごい嬉しさがあったと思うし、涙を流したのもその嬉しさがこみ上げてきて、涙が出てきたんだと思います。やっぱり正太郎を中心としてナインが一丸となって戦ったことが、ナインのみんなも英夫もそのことが嬉しかったんだと思います。

松本（男）：ナインはやっぱり陰をつくり合ったりして、心が一つになっていたと思います。心が一つになったから、あとあとで英夫や常雄たちも正太郎が悪いことをしても、警察に訴えることができなかつたと思います。正太郎が陰をつくらなかつたら、今のナインの関係はなかつたと思います。（板書②）

加藤（女）：それぞれ真夏の暑い中、戦っていてしんどいのに仲間を支えながら試合をしたことはすごく感動したし、もし私がその中の一員であって試合を乗り越えた時の気持ちを考えると、仲間を支え合った満足感でいっぱいだったと思います。

楠本（女）：この試合を乗り越えられたのは、お互いに助け合ってこの試合をみんなで乗り切ろうという気持ちと、みんなで力を合わせて勝ったという気持ちがあったと思います。みんなで団結して試合をしたいという気持ちがあったと思います。

廣瀬（男）：このナインが陰をつくったことによって、ナイン全体が一丸となって本当に良いチームとなったと思います。だから心が一つになって戦えたことが嬉しくて泣いたんだと思います。

仲田（男）：ナインは9人で一人というように、みんなが助け合って一人が苦しんだらみんなが苦しむというように、みんな助け合って支え合っていたから、最後まで戦い抜けたと思います。

井上（女）：さっきの漆原君の意見についてだけど、正太郎が陰をつくったのは、自分が勝ちたい一心

だったと言ったけど、私はそうじゃないと思います。やっぱり正太郎は英夫を少しでも楽にしてやりたいと思って、英夫を思う気持ちから陰をつくったと思うんです。私はやっぱり英夫とかナイン全体のことを思ってやった行動だと思います。

中山（女）：私も井上さんと同じ意見で漆原君の意見とはちょっと違うんだけど、やっぱり勝ちたい一心というんじゃないくて、仲間のことを本当に大切に思っていてみんなでいっしょに最後まで頑張りたかったからで、やっぱり一人しかいない投手の英夫が本当につらい思いをしているので、ちょっとでも力になってあげたくて、勝ちたいとかそういうんじゃないくて、自然とそういうことができたんだと思います。

村山（男）：僕も同じで英夫がピッチャーをやって、正太郎がキャッチャーだったから、英夫も球に球威がなくなれば一番わかるのがキャッチャーだから、正太郎は英夫の疲れぐあいが一番わかり、日陰をつくるという行動をとったんだと思います。そして、ナインも正太郎にひかれて、やっぱり全員で勝ちたいという気持ちがあって、一人が疲れることにより全員が駄目になるんじゃないくて全員が勝ちたかったからこそ、その一人を支えていくことのできる関係がそのナインの中にはあったんだと思います。

藤田（男）：僕は漆原君と同じで、やっぱり正太郎が日陰をつくってあげたのは、僕がもし、正太郎だったとしてもキャプテンとしてというか、捕手としてキャプテンとしてベンチでぐったりしているピッチャーを見たらもう見ていられなくなってしまって、日陰をつくったり、頭を冷やしてあげるような最善の努力をしてあげると思います。だから、僕は正太郎は勝ちたい一心で陰をつくったような感じがします。

松本（男）：僕はやっぱり漆原君と藤田君とは違って、勝ちたい一心もあったかもしれないけれど、やっぱり捕手と投手は心が通じ合い、投手のつらい気持ちがあるものすごくわかり、この試合を精一杯頑張っていきたいと思っていたからだと思います。

中山（女）：藤田君になんだけど、ぐったりしている英夫を見て、何とかしてあげたいとか、そういうふうに思うのはやっぱり、仲間を思う気持ちだと思います。でも、もし勝ちたいんだったら、ぐったりしているのを見て何とかしてあげたいとかいうんじゃないくて、一番始めに、このままだったら勝てんようになるかもしれないというようなことを考えるのに、ぐったりしている英夫を見て、陰をつくって上げたい、何か力になることをして上げたいと思うのは仲間を思う心だと思います。

岡本（男）：正太郎は英夫が疲れているのを見て、勝ち負けは別として、最後まで英夫を始めとするナインと最後まで戦いたいと思ったから、陰をつくったんだと思います。

T4：共に頑張りたかったということですね。

赤澤（男）：僕も正太郎が英夫に陰をつくったというのは、みんなでこの試合を乗り切っていかなければならないと思ったからだと思います。それだけナインは一つになれたんだと思いました。

T5：一つにつながったということですね。正太郎を中心にあれだけ頑張った。そういう関係であった。それにもかかわらず、正太郎は驚くほど変わってしまった。今の正太郎について、変わってしまった正太郎について、みんなが思うことを語ってほしいと思います。

村山（男）：かつての正太郎はナインを引っ張っていく統率力があって、リーダー的存在の強い人だったから、ナインがついていって、正太郎にも人を思いやる心があって、ナインにもその正太郎についていきたいという思いがあったと思います。でも、その正太郎が今では、心から信じ合っ

いた仲間から寸借詐欺とか、人を騙す行為とかをしていて、それは絶対に許せん行為だけど、正太郎の家では、家庭の中でお父さんの女出入りとかがあって、しょっちゅうもめていて、喧嘩のあるたびに正太郎は家出をしていたと資料の中にあっただけど、そんな家庭だったからこそ、正太郎がそこまで変わったんだと思うし、周りの大人によって子供は大きく左右されるし、影響もされやすいものだと思はれました。



廣瀬（男）：今の正太郎は許せないと思いました。旧友だから騙していいのではなくて、旧友だからこそ、騙してはいけないのだと思いました。陰をつくり合いながら19回を投げきったせっかくの絆を一人のせいで壊してしまっただけでいいと思いません。

圓藤（女）：村山君は小さい時からの家庭の事情が原因で変わってしまったと言ったけど、昔からそんな複雑な家庭環境におかれても、正太郎はしっかりとキャプテンとして、新道少年野球団を引っ張ってきたんだから、家庭のもめ事は理由の一つではあるけれど、正太郎がこんなに変わった直接の原因にはならないと思います。

T6：今の意見についてどうですか。

井上（女）：私は村山君の意見と同じで圓藤さんの意見もわかるんだけど、やっぱり子供というのは、周りとかそういうのに流されやすくて、だから正太郎も社会の流れとか、家の中の事情とかに負けてしまったんだと思います。そして、正太郎はずっと耐えていたものがあっただけで、それは新道がかわってしまったとたんに、やっぱり正太郎も心の支えみたいなものがなくなって、今まで親のそういう行動とかも我慢していたけど、やっぱり我慢できないようになったんじゃないかなと私は思います。

T7：今の発言に答えてどうでしょうか。

井上（男）：どんなに家の事情があっても、やっぱりそこまで信じてくれるナインのみんなを裏切ってしまうまで、そんな悪い行動をするのは、やっぱり正太郎は許せないと思いました。

中山（女）：井上君も言っていたように、今現在の正太郎は悪いと思います。これはもうみんながわかっていることだと思うけど、絶対悪いです。でも、やっぱり周りの人間のマイナスの影響とか、家族のいろんなもめ事があつたりして、新道が変わっていく中でやっぱり正太郎の中でも、何か変わっていくものがあつたんだと思います。

T8：いろいろと意見が出てきたけど、今の発言に触れてどうですか。

小川（女）：やっぱり人を騙しながら物を盗むことは、どんなことがあっても悪いことだと思います。もしそれで人が亡くなっていたら、大変なことになっていたと思います。だから、絶対に正太郎がしたことは悪いと思います。（板書③）

廣瀬（男）：あの正太郎が今こんなにおかしくなっているのは、家庭内でいろいろあったためだとしたら、それはやっぱりおかしいと思うんです。そのためにナインを裏切るというのは、さっきの日陰をつくったときの気持ちに当てはまると思うんだけど、あの日陰をつくって上げたときにナインのことを心から思っていたら、今は裏切っていないと思います。だから、日陰をつくったときの気持ちもやっぱり、怪しいような感じがします。

松本（男）：僕はこの正太郎は昔は良いことをしたような感じがするけど、やっぱり今は本当に悪いと思います。それから常雄や英夫はこの正太郎を訴えることができなかったと書いてあったけど、僕だったら、正太郎はやっぱり昔心を一つにして頑張った仲間だからやっぱり信じているし、訴えようと思っても、後でもとにもどってくれると信じて、訴えることができなかったと思います。

T 9：今の松本君の発言につなげて。

村山（男）：訴えるか訴えないかということなんだけど、僕の場合は訴えられないという方の意見です。英夫と常雄は実際に正太郎のことを訴えなかったけど、英夫たちの気持ちの中には、正太郎が騙し取ったものは絶対いつかは返ってくると信じていると思うんです。そんなに信じるのは、少年野球団のときに陰をつくってくれたりして、実際に支えてくれてとても力強い存在だって、とても尊敬していたからだと思うんです。もし、正太郎を訴えたら、自分の尊敬している人を消してしまうことになって、正太郎を支えとして頑張った部分までも消えてなくなってしまうと思ったから訴えられなかったんだと思います。

T10：今の松本君と村山君の発言に係わってくるんですけど、正太郎のしたことは絶対に悪いことであり、人として許せない絶対に悪いことですよね。これはさっき中山さんも言いましたけど、にもかかわらず英夫は許すだけでなく、「一人前になれたのは正ちゃんのおかげだ。」と正太郎に85万円という大金を騙し取られておりながら、正太郎に感謝までする。その許すだけでなく、感謝までする英夫について、みんなが思うことを聞かせてください。（板書④）

佐々木（女）：英夫は本当はすごく正太郎のことを憎んでいると思います。けどあの日陰をつくってくれた正太郎の優しさやナインみんなでつくった思い出を、嘘にしたくないという気持ちがあったと思います。

土内（女）：人間のだらしなさやうぬぼれで、自分だけ幸せを求めていくようになった世の中の流れの中で、英夫は85万円騙し取られたことによって、人間として大切な人間の結び付きだけは失いたくないと思ったんだと思います。

小川（女）：西日を遮ってくれた正太郎だし、新道少年野球団での仲間でもあったので、やっぱり全然日陰のないところに日陰をつくってくれたその思いが心に残って、感謝という英夫の思いがどうしても正太郎を訴えることをさせなかったんだと思います。

井上（女）：英夫というのは、昔の人間と人間のつながりがあった新道がすごく好きで、今の新道は変わっているけど、その昔の新道に思いを寄せて今まで頑張ってきたんだと思います。そして、新道と言えばやっぱり新道少年野球団が出てきて、新道少年野球団が出てくるということは、正太郎が陰をつくってくれたということが、やっぱり出てくるんだと思います。だから、そのことを否定することになれば、自分の心の支えをなくすことになるから、そのことはすごくいやだから、もう正太郎がやったことはすごく許せないけど、できるだけ正太郎を美化するというか、何でも悪いことをいいことの方に思うように英夫はしているんだと思います。

T11：(板書⑤)心の支えだったということ。

新野(男)：正太郎が英夫の心の中ではなくてはならない存在になっていて、そして、正太郎を信じないということは、英夫自身を信じないということになると思います。

中山(女)：私は最初憎んでいるのに感謝するという意味がわかりませんでした。さっきも出てきたことなんだけど、警察に届けるか届けないかという話なんだけど、きっと私が英夫の立場だったら、警察に届けると思いました。それは、英夫に陰をつくってくれたのは正太郎だったけど、同じ野球をやっていたメンバーも一緒に陰をつくってくれたので、正太郎だけが陰をつくってくれたのではないと思いつつながら、正太郎一人よりもたくさんの方のナインの方を選ぶと思ったからです。そんなことをいろいろ考



えているときに、一人の友達に言われたんだけど、「もし私が部落の人間として、私がこれからのこと、今のこと、いろいろと悩んでいてその苦しみをわかってほしくて、『私は部落の人間です。』って、この3年B組のみんななら打ち明けたら、そのとき3年B組のみんなが温かい眼差しで『何言よん、そんなこと関係ないよ、これからいっしょに学んでいこう。』と言ってくれたとき、それが陰をつくってくれたことになるのと違うん。私はそう思うんよ。」と言ってくれたんです。そのとき私はハッとしたんです。英夫と正太郎の関係は、私たちが同和問題の学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです。どんなことがあっても否定できない、どんなことがあっても切れることのない関係というものが、人間には必要なんだと思うんです。私たちは今まで、一生懸命に同和問題の学習に取り組んできました。私の住んでいる板野町には部落と言われて差別されている地域があります。この学習に真剣に取り組み始めたのは、差別を受けて悲しんでいる友の叫びを聞いてからです。今思うといろんなことがあったけど、頑張ってきてよかったと思います。この学習を始めてからナインのような関係ができてきたと思います。一人の子が自分のことを告白する周りのみんなが支える。そして、その子の笑顔がみんなの支えになります。ナインと同じだなあと思います。

井上(女)：私も中山さんの言った通りだと思います。このナインの関係というのが私たち今の3年B組の関係であってほしいと私は思いました。これは私もやっぱり、中山さんの言うように、どうして英夫は正太郎のことを許すのかなあと思っていたけど、中山さんと考えていて、やっぱり支えてもらったということはずごく嬉しいことだし、私も2年生からずっと公開授業とか、全体学習とかをやってきて支えてもらったことがたくさんあって、そのときのことが今もはっきりと心に残っているし、英夫というのはやっぱり正太郎が支えてくれたことがすごく嬉しかったんだと思います。

井上(男)：今聞いていて、やっぱりこのナインの資料は何か僕たち3Bにあてはまると思います。こ

れから徳島県も板野町も発展していくと思うし、やっぱり昔の板野がよかったなあと思うことがありと思います。僕たちは中学生だけど、これから高校へ進学したり、就職してでも、こんなナインのような関係になっていきたいなあと思います。

村山（男）：やっぱりこのナインの資料の中には、同和問題学習で学んできたことを土台として考えた方が何かわかりやすいところがあると思います。国語の学習という意味で考えたら答えを見つけるために決まった答えを探すために、みんな同じような考え方になっていくと思うんです。でも、同和問題の学習では、お決まりの答えを求めるのではなくて、自分の本当に感じたことや、自分の中でこみ上げてきたものを意見として語り合うことによって、どれだけ周りが反応してくれるかということが、大切だと思うんです。本当の思いと思いをぶつけ合うところに同和問題学習の本当の意味や喜びや楽しさがあると思うんです。また、今まで積み上げてきた同和問題学習によってこのナインの関係は3Bの中にもいっぱいできてきたと思うんです。支え合うということは本当に大切なことだと僕もしみじみ思っています。自分が発表したときに周りが支えてくれて、もっと頑張らないかん、こんな仲間のためにも、もっと頑張らないかんと思ってきたんです。このナインの団結とか、支え合うということを考えていくうちに、やっぱりみんなのことが真っ先に出てきて、それでこんな大きな授業とかをたくさん経験してきたから、ある程度は自分の思うままの意見が言えるようになってきたと思うんです。それでさっき井上君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだんと変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合って生きていくことができればいいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間に自分の心を開いて話のできる人がいなかったら差別されるかもしれません。だけど、今はこの周りに仲間がいるから、どんなことがあっても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくってきたいと思います。

松本（男）：このナインとこのクラスはほとんど一緒だと思います。ナインも助け合ったり、支え合ったり、協力し合って何か一つのことを頑張っているし、僕らのクラスもやっぱり一人ひとりが、一人がみんなをみんなが一人を支え合い励まし合って、同和問題学習に頑張っているから似ていると思います。それから、今この学習を頑張っていて、やっぱりさっきも言ったんだけど、もう少ししたら中学も卒業で就職や進学をするし、やっぱり就職や進学したら、目に見える差別に出会うことも出てくると思うんです。だから、今のこの関係やこの思いとかを忘れないで頑張っていかなければいけないと思います。

圓藤（女）：私もみんなが言うようにナインとこのクラス3Bはよく似ているなあと思いました。それで先生が道徳教育と同和教育は違っていて言いましたよね。確か、この大会で部落問題ずばりの資料はできんと言いましたよね。でも、私はこの資料「ナイン」の学習で、ナインは私たちのクラスに似ているなあというところが出てきたけど、私たちのクラスの今の関係は今までの同和問題の学習によって成り立っているんだから、道徳教育と同和教育は全く一緒でないかもしれないけど、結局はつながっているんだと思います。

井上（女）：圓藤さんの意見が出たんだけど、私たちがこの富田中学校にきて授業すると聞いたとき、私たち3年B組は同和問題の学習をするもんだと思っていたのに、こういう直接同和問題に触れ

ない資料をするということで、ちょっとやりにくいなあと思っていたけど、結局、同和問題の学習も道德の学習も一緒に人間の生き方につながっているものだから、みんないろいろな意見が出たと思うんです。結局、人間というものは支え合ったりして、生きていかなあかんもんやし、だから、私は社会の流れとかに流されんようにして今までのみんなとの関係を大切に守りたいんです。私にたくさんの子が、自分の一番つらかった部分だった部落に生まれたということを書いてくれたけど、私は絶対にその子たちを裏切ることがないように、その子や西日に照らされて苦しむようなことがあったら、さっと日陰をつくれるような人に私はなりたいなあと思います。

中山(女)：私も圓藤さんや井上さんの意見に付け足すんだけど、やっぱり始めにナインの資料をもらったときに思ったことは、何か難しいということが一番最初に思っ、2回目、3回目と読んでいくうちに、段々いろんな考えが生まれてきたし、クラスでも意見の違う人がたくさんいて、話し合いも盛り上がっているんだけど、どうしても私は考えが変えれんというか、こだわっていたところがあるんだけど、今までの同和問題学習で築き上げてきたクラスの信頼関係と平行して考えていくと、ナインの奥に流れているものがよくわかってきたんです。やっぱり、この資料「ナイン」だけで考えていったら、今のような発表とか、私の発表とかはなかったと思います。そして、みんなが心を一つにして、板野中学校全員で同和問題について学んできたから、いろんなことが考えられて、こうやって発表ができるんだと思います。

楠本(女)：このナインとこのクラスの関係は似ているところがあると思います。私も前にみんなを信頼して自分の一番つらい部分を打ち明けたんだけど、周りの子が支えてくれたときは嬉しかったです。はじめは言おうかどうしようか迷ったけど、みんなが支えてくれたので言ってよかったです。

大森(女)：3年B組とナインはもうそのまま同じだと思います。自分のことを告白して、その子がそのままではなく、みんなが支えてその子の陰になっているから、このクラス全員がみんな一人ひとりの陰に入っているんだと思います。

廣瀬(男)：このナインと3年B組はやっぱり同じだと思います。この「ナイン」の資料と部落問題学習の資料も根本は同じではないかと思いました。そして、高校に行って困難にぶつかることがあっても、僕は今まで僕を支えてくれた人とか、3年B組のみんなのことを思い出して、自分で自分自身を励ましながら頑張っていくと思います。

T12：英夫の気持ちや英夫の姿に我々3年B組というつながりを重ねて、みんないろいろな思いを語ってくれた。英夫の思いを今一度かみしめてみたい。最後のところで英夫が「自分たちは日陰なぞありえないところにちゃんと日陰をつくった。このナインにはできないことはないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちは今でもどこに残っていると思います。だから……」。(板書⑥)この「だから……」の後に飲み込んだ言いたかった思い、この英夫の思いに寄せてみんなの思いを語り合ってほしいと思います。

漆原(男)：やっぱり英夫は今も、ナインのみんなの心は一つになっていることを望んでいるんだと思います。

村山(男)：このナインにはできないことはないんだという強い気持ちがあったんだと思います。それでも僕もこの富田中学校へ来る授業の前に、このクラスのみんなにはできないことはないんだと思って、みんなを信じて授業に来て、実際にこの授業をしたら、やっぱりすごいなあって思いま

した。それで英夫の思いはやっぱり、このナインの関係を絶対になくしていきたくないという気持ちと、ナインを信じていた自分の気持ちを常雄や正太郎や他のナインも同じように思っていると思って、頑張り続けるものになっていったんだと思います。

永峰（女）：新道少年野球団のキャプテンとして、活躍してきた正太郎が、他のナインたちの気持ちを打ち破り、常雄や英夫たちを傷つけたけど、今でも優しい気持ちは正太郎の心の中にあると思うから英夫たちは憎めなかったと思います。

土内（女）：陰をつくった正太郎が英夫の苦しみを自分の苦しみとして背負ったように、ナインだから、ナインとしての掛け替えのない仲間だから、その心はまだ、正太郎の心の中に残っているという思いを込めていると思います。

太田（女）：ナインみんなが集まれば陰のないところでも陰をつくれる。そして、できないことはないんだという気持ちが今の正太郎に少しでも残っていたら、自分のやっていることがみんなに迷惑をかけていることにも気付いてくれるという自信と信頼が英夫にあったと思います。

T13：自信と信頼ということですね。

斎藤（女）：私が3年B組のみんなを大切に思っているように、英夫も正太郎のことを大切な人と思っていると思います。

松本（男）：僕はここでは正太郎を信じているか、いないかだと思います。正太郎を信じていたから、さっきから僕が何回も言ったことだけど、英夫は正太郎を警察に訴えることができなかったし、英夫に感謝までするという思いがでてくるんだと思います。

井上（女）：英夫というのは、自分には正太郎を信じることにしかないんだと思っていたと思います。だから、正太郎が心を入れ替えて帰るまで、その正太郎がつくった穴を埋めることしか自分にはできないんだと思ったんだと思います。そして、やっぱり自分たちナインには何もできないことはないと思っていたから、変わっていった新道を自分たちなら昔の温かい関係の元の新道に変えられると思ったんだと思います。もし、新道の街自体が大きく変わってしまっても、昔の人間と人間との絆があった新道のよさをもって、自分たちは頑張っていくことができるという自信があったんだと思います。そして、今私は英夫みたいに、絶対に切れることのない、みんなとの絆を大切にしたいし、自分たちには何もできないことはないと思っているから、たくさんの人が板野という町をどう思っているかは知らないけれど、私は3年B組のみんなとなら絶対に、板野町に対する偏見の目とかを変えていけると私は今、自信を持っています。

中山（女）：私も井上さんと同じような意見なんだけど、この3年B組のクラスの中に私がいてよかったと思います。みんなの前だったらいろんなことを発表できるし、そして、もし友達とかがその友達のつらいことを告白してくれたときでも、このクラスのみんなだったら一人にしないで、すぐに手を挙げて支えてくれるし、そんな仲間とならどんなことでもできると思います。そして、私もみんなとともにこの板野町をどんなふうに考えている人がいるかわからないけど、そんな偏見の目を一生懸命頑張って変えていきたいと思います。

松本（男）：このクラスは僕の一番言いたいことがはっきり言えたクラスであり、やっぱり心が通じ合ったクラスであるから、この思いを忘れないで将来この思いを生かして、差別とかにも対抗して頑張っていきたいと思います。

T14：みんなの思いがいっぱいつまった授業になってきた。そのことが嬉しい。そして、本当に時間が

わずかになってきたんですけど、前の時間の話し合い。また、この時間の話し合い。いっぱい言いたいことがあるだろうけど、あとわずかな時間をもらってみんなの中にある思いを最後に出し合って、この時間を閉じたいと思います。

村山（男）：この「ナイン」の学習ももともになるものは同和問題学習だと思います。この資料も国語として考えれば難しいことがいっぱいあって、あまり考えが出てこなかったと思うけど、今まで取り組んできた同和問題学習を土台として考えてみたら、どんどん考えが深まってくるし、出てきた意見についても自分でもっともっと考えていかなければという思いがあって、実際に考えられるようになったのは、同和問題の学習があったからだと思うんです。前の時間に道徳の学習と同和問題の学習は違うという話があったけど、やっぱり道徳の学習をしていく上でも、今までの同和問題学習の積み上げがあったから考えることができたし、僕たちは同和問題学習の方を先に重点的に勉強していたから、ここまで意見が言えるようになって、この「ナイン」の資料とかもより深く考えられるようになったから、同和問題の学習は人間の生き方を考えていく基本として、とても大切なものだと思います。また、ここまで周りのみんなを信頼できるようになってきて、支え合う仲間ができてみんなとの絆がどんどん深まってきたのは、やっぱり同和問題学習があったからだと思うんです。僕には同和問題学習を通してできた仲間がいたから、今の自分があるんであって、仲間がいなくて支えがなかったら今の自分はなかったと思います。

井上（男）：今日の授業はみんなに熱いものがこみ上げてきたと思います。こんなに発表するんだから、みんな一生懸命になっているんだと思います。そして、前を見てみると「人間としての生き方を考える道徳教育」と書いてあるけど、やっぱり村山君の言うように人間としての生き方を考えていく上では、同和問題学習も道徳の学習も変わらないんだと思います。

圓藤（女）：この「ナイン」の資料を最初に読んだときは、まさかこの「ナイン」が同和問題学習と重なっているとは思わなかったけど、いざそうやって考えてみたらそうだなあと納得できて、今この場に自分が居れたことをとてもうれしく思います。それで、このみんなとずっとこれからも頑張っていきたいし、ナインは正太郎のせいで崩れていくような感じになったけど、私たちは絶対正太郎みたいな人を出さずにそのままずっと崩れないでいきたいです。

土内（女）：今日は私の友達が初めて手を挙げてくれてすごく嬉しかったです。友達も嬉しかったと思うけど、その嬉しさが自分のことのように思えてきて、何か本当に嬉しかったです。それと、今日手を挙げられなかった人も、自分ではできないと信じないで、自分ではできるんだと信じたら絶対できると思うから頑張ってほしいです。

T15：ありがとう。時間がきてしまいました。

生徒：時間延長できんのですか。ほなって手を挙げとる子、ようけおるし……。

T16：時間もらいます。

姫田（男）：今日僕は一回も発表してないけど、さっきからずっと考えていたんだけど、「ナイン」を最初、授業する前は同和問題学習とは全然関係ないと思っていたけど、「ナイン」を勉強していくうちにやっぱり同和問題学習と結び付きがあるんだと思いました。だからこそ何かこんなに熱いものがこみ上げてくるんだと思いました。

川田（女）：みんな信頼とかいっぱい言ってくれたけど、私はこの前ちょっと発表できなかつたりして、みんなを裏切ろうとしていました。そのことを先生に言ったら、それは今まで信頼してくれた友

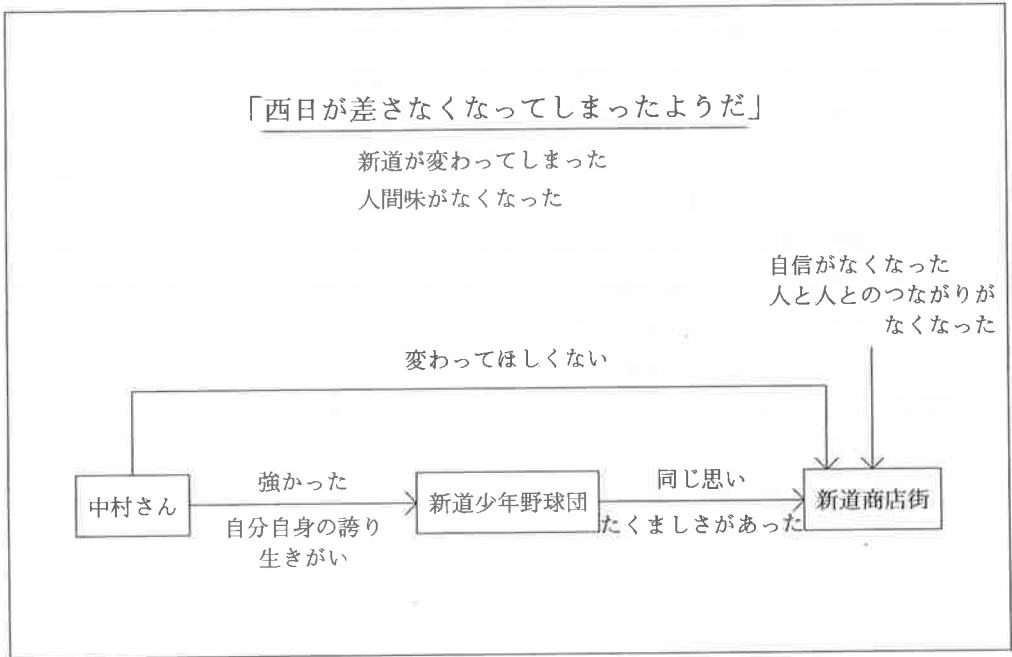
達を殺すことになってしまうとと言われてすごくそれから悩みました。だけどそんな私でも、みんながいてくれたから、これからまた燃えられるようになるかなと思いました。

中山（女）：私たちもやっぱり川田さんのような人がいて、友達がいるから、川田さんのように発表してくれる友達がいるから、これからも頑張ろうと思うし、今頑張れているんだと思います。

井上（女）：この資料を読んでやっぱり最初に思ったことは、経済的には豊かになってきた日本だけど、どんどん人間の心というのは貧しくなりつつあるん違うかなあと思いました。この正太郎のように社会の流れに流されて変わっていく人ってたくさんいると思うんです。だけど、私たち3年B組だけは絶対に変わらないままで今の絆を大切にしたいなあと思いました。それでこの勉強をしていて英夫という人は、同和問題を考えていく上でも、人間の悲しみとか、部落差別とかの悲しみがすごくわかる人だと思います。だからだから私達も英夫のようにずっと仲間を信頼して生きたいし、そして、今の3年B組のみんなだけでなく、たくさんの人と陰をつくり合って、この絶対おかしい差別をなくしていかなければならないと思いました。それに今日みんなすごく輝いていたと思います。

T17：（板書⑦「3年B組の絆」）終わります。

第1時の板書



第2時の板書 (本時)

